

## 事例論文における離婚・別居

—2010年代の心理臨床学研究掲載論文のレビューから—

曾山 いづみ

(奈良女子大学研究院生活環境科学系)

要約：本研究では、2010年4月以降に出版された心理臨床学研究に掲載された事例論文のレビューを行い、離婚・別居についての記載のある50論文を抽出し、その特徴について検討した。離婚や別居がCIに与える影響としては、①CIの発達や人格形成に深刻かつ否定的な影響を及ぼしている、②離婚・別居がCIに現実をつきつける体験となっている、③離婚・別居に由来する環境変化がCIに大きな影響を与えている、④離婚・別居がCIにとっての外傷体験・被剥奪体験となっている、といった特徴が挙げられた。一方で、離婚・別居についての考察がほとんどない論文も多く見られ、家族関係やシステムについての視座が必要であると考えられた。

キーワード：離婚, 別居, 事例論文, 心理療法・カウンセリング, 文献レビュー

### 問題と目的

日本において、離婚は長らく家庭内の問題としてとらえられ、司法も積極的な関与を行ってこなかった。日本における離婚件数は、平成26年度で222,107件、平成27年度で225,000件(推計数)と依然高い割合で推移している(厚生労働省, 2016)。それに伴い、親の離婚を経験する子どもたちの割合も増加している。

日本における離婚の特徴としては、単独親権制度をとっていること、離婚の約9割が裁判所の絡まない協議離婚であることが挙げられる。それゆえ、「夫婦の別れ」である離婚が結果的に「親子の別れ」となってしまったり、子どもの気持ちが置き去りにされてしまうことも多かった。そのような中で、離婚が子どもに与える影響を指摘する文献が出版されるようになり(小田切, 2004; 家庭問題情報センター, 2005; 棚瀬, 2010 等), 離婚時に子どもを適切にケアすることや子どもの気持ちを尊重することの重要性が徐々に認識されるようになってきている。

心理療法やカウンセリングの場でも、親の離婚や別居を経験している子どもや、自らが離婚・別居しているクライアント(以下CI)が来談することは多い。彼らの主訴は様々であるが、背景に離婚や別居の影響があると考えられる事

例も決して少なくはない。

上述の通り、子どもが離婚に適応していくためには、離婚時に親が子どもを適切にケアしていくこと、子どもの気持ちを尊重することが重要である(小田切, 2004; 家庭問題情報センター, 2005; 棚瀬, 2010 等)。一方で、離婚という出来事は極めて個別性の高い事象であり、それぞれの事例の文脈に即した理解と対応が必要とされるという難しさを併せ持っている。心理療法やカウンセリングといった対人援助の場においても、離婚や別居が家族メンバーに与える影響を個別の事例に応じて適切に理解しかかわっていくことは非常に重要であると同時に、とても難しい課題でもある。

しかし、日本の臨床心理学領域において、離婚や別居についての研究は未だ少なく、心理療法やカウンセリングの場で離婚や別居がどのように扱われているのか、メタ的に検討した研究は見られない。

そこで、本研究では、離婚や別居といった出来事が心理療法においてどのように扱われているのか、離婚や別居といった出来事がCIに与える影響がどのように理解され対応されているのか、を検討することを目的とする。具体的には、事例論文の中で離婚や別居に言及されている論文を取り上げ、それらの分類・整理を通し

て、心理療法やカウンセリングにおける離婚や別居の特徴について検討する。事例論文を対象としたのは、①多くの場合、事例論文は事例が終了した後に担当者（研究者）が事例を多角的に考察して執筆するものであり、その事例にとって重要であったと思われる要因が重点的に論じられている、②長期的なスパンでの検討がしやすい、③様々な現場における事例を収集しやすい、といった理由から、メタ的な視点での検討がしやすいと考えたためである。

## 方法

### レビュー対象論文の選定

事例論文が多く掲載されている学会誌として、心理臨床学研究を取り上げた。具体的には、2010年4月以降に出版された心理臨床学研究（28巻1号～34巻4号）で、何らかの形で事例を扱っている（臨床素材としている）論文を「事例論文」と定義した。事例論文の中には、いくつかの事例を基にある理論や概念、特徴などを検討している論文もある。本研究では、1つ1つの事例の流れを知りたいという目的から、1つの論文内で4つ以上の事例が掲載されているものは対象から外し、3つ以内の事例が扱われている論文を対象とした。対象となる論文において、事例の概要等で、離婚、あるいは別居についての記載がある50論文を抽出し、検討対象とした。なお、レビューの対象となった論文については、引用文献の欄に記載している。

### 分析方法

上述の50論文を読み込み、事例の概要、相談機関、来談者（以下CI）、離婚や別居の経緯、事例の経過、離婚や別居による影響、考察について簡単にまとめた表を作成し、分類・整理を行った。

## 結果

上述の通り、離婚・別居についての記載がある事例論文は50篇、1論文の中に離婚・別居の関係する事例が2つ以上含まれる論文があったため、対象事例は54件であった。以下では、

守秘義務の観点から、事例の内容を細かに記載することは避け、該当論文の整理・分類の結果を示す。なお、事例論文においては、CIのプライバシーを保持する目的から本質的でないと思われる部分を改変したり情報を伏せていることがある。本研究では、該当論文に記載されている通りに分類を行っている。

### (1) 来談者（以下CIと総称）の性別、年齢

表1にCIの性別と年齢をまとめたものを示す。

表1 CIの年齢・性別一覧

年齢	男性	女性
～10代前半	11 <sup>(*)</sup> (同3・並2)	5 <sup>(*)</sup> (同1・並1)
10代後半	0	3
20代	4	7
30代	2	9(保1) <sup>2)</sup>
40代	2	5(保1) <sup>2)</sup>
50代	1	1
60代	1	1
70代	0	0
80代	0	1
年齢不明	0	1(保1) <sup>2)</sup>
計	21	33

\*1：件数の中に母子同席面接／並行面接が含まれていることを示す。

\*2：件数の中に保護者面接が含まれていることを示す。

該当論文の中には、親子双方の面接を担当し両方についての記載がある事例、症状を呈しているのは子どもで面接に来談しているのは親であるという保護者面接の事例も含まれている。親子双方がCIとなった事例では主訴を呈している側（多くの場合子ども）の年齢と性別について記載し、保護者面接についてはCIである保護者の性別、年齢を記載した。

該当論文の中で、CIが男性のものは21件、女性のものは33件であり、女性の方がやや多い結果となった。一方で、年齢別にみていく

と、10代前半までは男性が非常に多く、10代後半～40代にかけては女性の方が多くなっていた。10代前半までの事例のうち、CIが小学生以下の場合には、児童養護施設などで実施されている面接を除いて、母子並行面接または母子同席面接が実施されていた。また、女性がCIの件数には保護者面接が3件含まれていた。

## (2) 離婚・別居の別

本人または子どもの立場で離婚を経験していた事例は42件（うち心理療法・カウンセリング継続中に離婚した事例4件）、別居（家庭内別居を含む）を経験していた事例は12件（うち離婚調停中1件、未婚2件）であった。

## (3) 離婚や別居を経験した立場

CIがどの立場で離婚や別居を経験したのかを示したものが表2である。

表2 離婚／別居経験時の立場

			計
離婚	親の離婚	25	42
	CI本人の離婚	14	
	親・CI両方が離婚／別居	3	
別居	親の別居	10（うち未婚2件を含む）	12
	CI本人の別居	2	

CI本人（保護者面接受含む）が自分の配偶者との離婚を経験した事例は14件（うち親が未婚でCIが生まれた事例1件を含む）、子どもの立場で親の離婚を経験した事例が25件（うち離婚後再婚した事例3件、祖父母も離婚している事例1件を含む）であった。CIの親も離婚または別居を経験し、CI自身も離婚または別居を経験している事例は3件であった。別居については、CI本人が自分の配偶者との別居を経験した（している）事例は1件、CIの両親が別居していた（している）事例が10件（うち、

親が未婚のままCIが出生した事例2件を含む）であった。

## (4) 相談機関

面接の行われた相談機関を示したものが表3である。

表3 相談機関

相談機関	事例数
外来相談機関	26
入院施設 <sup>*1</sup>	5
乳児院・児童養護施設等	8
学校（SC）	7
学生相談	2
刑務所	3
女性保護施設	1
高齢者福祉施設	2
計	54

\*1：退院後外来での治療に移行した場合を含む。

外来の相談機関には、病院・クリニック・大学付属の相談室等が含まれる。本来はより細かく分類すべきなのかもしれないが、事例論文においては、相談機関の特徴が詳しく記述される場合もあれば、「外来の相談機関」という記述のみのとどまる場合もあり、正確に分類することが難しいと考えられたため、有料・無料・保険診療にかかわらず「外来相談機関」というカテゴリにまとめた。

相談機関別にみると、外来相談機関での事例数が最も多く、26件であった。次に乳児院・児童養護施設（一時保護所含む）が8件、学校（スクールカウンセラー：以下SC）が7件と続いている。刑務所での事例も3件あった。

上述の通り外来相談機関には様々な形態が含まれているため、最も事例数が多いというのは妥当な結果であろう。外来の相談室における主訴は様々であり、面接経過の中で離婚や別居についてのCIの言葉が記述されている事例もあれば、概要部分で離婚や別居の事実のみが記され、面接経過や考察には離婚・別居についての記述がない事例も多くみられた。また、面接者のオリエンテーションが多様であることも外来

相談機関における事例の特徴であった。

外来相談機関に次いで乳児院・児童養護施設の事例数が多いことも、離婚・別居事例の特徴といえるだろう。家庭では養育が難しいときや虐待・DVの被害にあっているときに乳児院・児童養護施設に入所することもあり、複雑な家庭環境であったり、離婚や別居だけでなく暴力の問題が絡んでいたり、親族とほぼ連絡が取れない状況にあるという事例も見られた。乳児院・児童養護施設における事例では、心理療法場面だけでなく生活場面への援助も通してCIの安定を図ること、連絡が取れる家族がいる場合にはその家族との関係調整を行っていくこと（その場合家族メンバーへの援助も行っていくこと）が中心となっていた。離婚や別居についての記載は多くはないが、CIが家族の中でどのような経験をしてきたのか、家族に対してどのような思いを抱いているのかは、大切なテーマとして扱われていた。

学校（SC）のケースでは、子どもの問題行動が離婚・別居にダイレクトに影響を受けていると考えられる事例（Thがその問題を取り上げ、コンサルテーション等を行うことで問題行動が落ち着いた事例）が数件見られた。また、保護者面接の中で保護者であるCIの原家族について話されたり、CI自身が離婚を経験するという事例もあった。後者についてはスクールカウンセリングの枠組みの中で保護者面接を行うことの意義についての考察が中心となっており、離婚や別居がCIにどのような意味を持つのか、離婚や別居がCIの子どもにどのような影響を及ぼすのか、についての考察はあまりなされていなかった。

刑務所における事例では、ロールレタリングや治療共同体といった手法の中で、離婚や別居経験についても語られ、離婚や別居といった経験の中でCIがどのような傷つきを経験してきたのか、詳しく記述されている事例が多く見られた。離婚・別居を外傷体験として考察している事例もあり、罪を犯した人に対する心理療法においては、CIの成育歴とそこでの傷つきがきちんと受け止められ、CIがそれに向き合えるようになっていくことの大切さが論じられて

いた。

## (5) 離婚・別居による影響についての記載

概要部分に離婚・別居の記載があるのみの事例が32件、面接経過の中に離婚や別居の経緯やCI自身の離婚・別居に対する思いが記述されている事例が22件、そのうち離婚や別居がCIやその子どもに与えた影響についても考察されている事例が11件であった。考察については、離婚・別居の体験を外傷体験ととらえるものや、居場所からの引き離しや家族像の変質といった文脈、世代間連鎖といったテーマでの考察がなされていた。この件については、次項で詳しく検討していく。

## 考察

### 年齢・性別による特徴

CIの年齢、性別から、10代前半までは男性CIが多く（その多くは10歳未満であった）、10代後半～40代にかけては女性CIが多く、50代以降は男女ほぼ同数となっていた。20代までのほとんどは、親の離婚を経験したCIである。親の離婚を経験した子どもたちは、離婚時の年齢にもよるが、男児（男性）は怒りを外に向けるような形で表現することが多いのに対して、女児（女性）は怒りを内に向けたり、自分が親密な関係を持つ年頃になって離婚の影響が遅延して現れる可能性があることが指摘されている（棚瀬，2010）。本研究で対象とした事例は必ずしも離婚や別居を主訴としているわけではなく、離婚による影響について触れられていない論文もあるが、10代後半～20代以降のCIで離婚・別居についての記述が多い事例は、例外なくCIが離婚・別居を巡る出来事の中で深い傷つきを体験していることが窺われた。これらの結果は、概ね先行研究の知見を支持する結果と言えるだろう。

30代、40代では、CI自身が離婚・別居をしている事例と親の離婚・別居を経験している事例、CIと親双方が離婚・別居を経験している事例が見られた。この年代では、ほかの年代と比べて離婚・別居についての考察が少ないのが特徴である。事例経過中に離婚が成立した事例



や、親の離婚・別居による影響を面接者に訴えた事例、親とCI自身の離婚の経験が否定的なスキーマの形成の要因となっていたと思われる事例については離婚・別居についても検討されていたが、それ以外の事例では、主訴と離婚・別居が関係していそうに思えても、CIと面接者との関係性や、CI個人の特性についての考察が主となっていた。

50代以降の事例では、大半がCI自身が離婚・別居を経験した事例であった。相談経過の中で離婚・別居について触れられているのは、相談経過中に離婚が成立した1件と、未婚の家に生まれ「父親がどんなものか知らない」ゆえに現在の家族との間でもいい関係が築きづらいと考えられた1件であった。50代以降の事例では、離婚・別居以外に現在の不調（主訴）に影響を与えていると思われる要因が多くあり、結果として記述が少なくなっていたと考えられる。

#### 離婚・別居による影響

上述の通り、事例の概要部分以外に離婚・別居の経緯やCI自身の体験や思いが記されている事例は54件中22件（約40%）であり、さらに離婚・別居がCIやその子どもに与えた影響についても考察されている事例は11件（約20%）であった。以下では、主に離婚・別居についての記述があった事例を中心に検討する。

離婚・別居がCIに与えた影響としては、①両親やCI自身の離婚・別居の経験が、CIの発達や人格形成に深刻かつ否定的な影響を及ぼしている（例：両親の葛藤を身近で見ていたことにより、言葉を発すること＝人を傷つけることと理解し緘黙に至ったと考えられた事例（上野，2010）、両親の不仲・離婚と自身の離婚が否定的スキーマの形成要因であったと考えられた事例（山本，2012）、両親の不仲やどちらかの不倫についての話を聞かされ続けたことで自分を大切にすることができなくなった事例（森国，2012等）等）、②離婚・別居がCIに（厳しい）現実をつきつける体験となっている（佐伯，2012等）、③離婚・別居に由来する環境変化がCIに大きな影響を与えている（本田，2014等）、④離婚・別居がCIにとっての外傷体験・被剥

奪体験となっている（毛利ら，2014等）ことが挙げられる。

①や④の場合には、CIは長期的に離婚・別居による影響に苦しむことになると考えられる。この場合、離婚や別居といった経験がCIに与えた（かもしれない）影響について、面接者側がきちんと意識しておくことが大切だと考えられる。今回分析対象とした論文においては、家族システムの視座や両親との関係（母子関係にとどまらない）、世代間連鎖について考察されている論文も見られたが、一方で何かしら離婚・別居の影響がありそうにもかかわらず、CI個人のパーソナリティについてのみ、あるいは安定した母子関係が築かれなかったことのみが考察されている論文も多く見受けられた。もちろん、事例論文には紙幅の制限があり、筆者が重要だと感じた視点や理論から事例をまとめるゆえ、すべての観点を盛り込むことは不可能である。しかし、離婚は個人の心の問題であると同時に家族関係の問題にほかならない（藤田，2016）。CI個人の要因や母子関係のみに視点が行き過ぎることで、問題の要因が不当にCI本人の特性や母子関係にかぶせられてしまいかねないことには注意が必要であろう。

②においては、今までのCIの生き方や対人関係の持ち方（自己主張しない、他人に頼る、等）が通用しないような事態として離婚・別居が経験されており、CIがどうにも行き詰って面接にやってくるという動きが見られていた。ここでは、CIが安全な面接環境で新しい方法を身に着けていくことができることで、事例が展開していく様子が見られた。

③においては、面接者が離婚・別居と環境の変化に気づき、それを面接の中で取り上げることを通して、CIの不応状態への理解が深まり、問題が解決していくという過程が見られた。この場合においても、面接者が離婚・別居が家族に及ぼす影響について知っており、それへの対応方法を伝えたり、一緒に考えていけることが重要であるといえよう。

#### 今後への示唆

最後に、今回レビューの対象とした論文の中

から、今後離婚・別居に関連した事例への対応を考える際に重要だと思われる指摘をいくつか紹介したい。

奥村 (2014) は、CI が怒りを抑圧していると考えられる場合に、いきなり怒りに触れようとするのではなく、まず情緒や恥について取り扱うことの重要性を論じている。怒りよりも情緒や恥が先行するというのは、日本の文化的な特徴といえるかもしれない。両親の離婚を経験した子どもは、両親それぞれに対して何らかの形で怒りを抱くことが指摘されているが (棚瀬, 2010 等), 日本においては「怒を感じる」ことに對しても罪悪感を覚える場合がある。このような場合に、CI にとって触れやすい感情、怒りの前にある情緒や恥について丁寧に扱っていくことが、結果として CI の持つあらゆる感情を大切にしていくことにつながると考えられる。

中尾 (2016) は、自己愛が傷つきやすい CI に対して、侵襲的でない言葉を紡ぐことが重要であることを指摘している。両親の葛藤に巻き込まれ、健全な自己愛を育むことができず、また両親への怒りを感じることも罪悪感を抱くような場合においては、CI 本人が「自分の気持ちを表現してもいいんだ」と思え、そして「自分はこう思っていたんだ、感じていたんだ」と気付けるようになることが大きな目標である。面接者は侵襲的にならないよう、かつ CI が新しい考え方に拓かれるよう、注意して言葉を紡いでいく必要があるといえよう。

今回のレビュー対象論文ではないが、離婚を経験した子どもたちへのインタビュー調査を行った藤田 (2016) は、子どもたちへのケアとして必ずしも悩みや葛藤の深い洞察を目指すような心理療法にこだわるべきではなく日常的で柔軟なさりげないサポートも重要であること、子どもたちが抑圧してきた自分の体験や苦しみを語れるようになる (「語り」を取り戻す) プロセスが大切であることを論じている。離婚や別居といった出来事においては、深い・洞察的な心理療法が必要な場合は多くないのかもしれない。一方で、CI が望むならば、心理療法の場が「語り」を取り戻す (藤田, 2016) 場と

なる可能性は大いにある。CI の言葉に謙虚に、真摯に耳を傾けつつ、丁寧に事例を理解してこうとする姿勢が求められているといえるだろう。

## 引用文献

### レビュー対象論文

- 吾妻壮 (2012). 関係性と中立性 心理療法の立つところという問題をめぐって 心理臨床学研究, 29 (6), 683-693.
- 淵野俊二 (2011). 乳児院における遊戯療法と生活場面での心理的支援 乳幼児期に母親から身体的・心理的虐待を受けた子どもの事例を通じて 心理臨床学研究, 29 (4), 430-441.
- 深瀬裕子・岡本祐子 (2013). 施設入所高齢者との心理療法における事例理解 Erikson の心理社会的課題の援用 心理臨床学研究, 31 (5), 725-735.
- ガヴィニオ重利子 (2014). スクールカウンセリングにおける精神分析的あり方について 心理臨床学研究, 32 (6), 683-693.
- 橋本忠行・安岡馨 (2012). ひきこもり青年とのロールシャッハ・フィードバック・セッション グラウンデッド・セオリー・アプローチによるクライアント体験の検討 心理臨床学研究, 30 (2), 205-216.
- 本田早由里 (2014). 不登校を通して”本当の自分”を育んだ中学生女子との面接過程 心理臨床学研究, 32 (2), 204-214.
- 池志保 (2013). 「非創造的」に生きていた芸術活動者 心理臨床学研究, 30 (6), 899-910.
- 石橋大樹 (2013). つながることへの拒絶とその対象関係 重篤な摂食障害患者との精神分析的な心理療法過程 心理臨床学研究, 31 (2), 177-187.
- 鹿島なつめ (2011). 対人関係の「裏切られた感じ」から不登校となった前思春期女児との面接過程 心理臨床学研究, 29 (2), 177-187.
- 檜村通子 (2012). 2 事例からみた風景構成法

- の治療的機能 心理臨床学研究, 30 (2), 161-172.
- 古賀聡 (2011). 心理劇によるアルコール依存者の対人関係再構築と将来展望への援助 心理臨床学研究, 29 (2), 129-140.
- 古賀聡 (2012). パニック発作に苦しむ DV 被害女性への解決志向催眠療法 心理臨床学研究, 29 (6), 705-716.
- 小久保聡 (2015). 自己のなかに他者を見いだす体験の治療的意義について 心理臨床学研究, 33 (3), 252-262.
- 久羽康 (2013). セラピーにおける他者性についての現象学的考察 心理臨床学研究, 31 (3), 376-386.
- 棚澤令子 (2010). 母子の育ちなおしのプロセス 精神疾患をもつ親の子育て支援 心理臨床学研究, 28 (4), 401-411.
- 丸山明 (2013). 学校臨床における保護者面接から心理療法への移行について 転移関係に注目して 心理臨床学研究, 31 (1), 27-37.
- 丸山広人 (2012). 巡回相談としてのスクールカウンセリングの試み 小学校におけるシステムズ・コンサルテーションの効果を高めるために 心理臨床学研究, 30 (3), 298-308.
- 森石加世子 (2011). 母親の子どもからの分立のプロセス 不登校の中学生の母親面接を通して 心理臨床学研究, 29 (5), 598-609.
- 森国佐知 (2012). 性的行動化を繰り返した思春期女性との心理療法過程 心理臨床学研究, 30 (5), 691-702.
- 毛利真弓・藤岡淳子・下郷大輔 (2014). 加害行動の背景にある被虐待体験をどのように扱うか? 刑務所内治療共同体の試みから 心理臨床学研究, 31 (6), 960-969.
- 長沼佐代子 (2013). 破壊的自己愛の展開 家族に惨事をもたらしていた男性の事例から 心理臨床学研究, 31 (4), 575-585.
- 永田悠芽 (2010). ある被虐待児の心理療法で展開された「生きる意味への問い」 心理臨床学研究, 28 (2), 196-206.
- 内藤みちよ (2013). “切られる”体験から“解いて”“結び直す”体験へ 施設入退所を繰り返すDV被害者との面接過程を通して 心理臨床学研究, 31 (3), 387-398.
- 中尾文彦 (2016). クライエントの主体性を侵襲せずに心に届く言葉を紡ぐ工夫について 心理臨床学研究, 33 (6), 545-555.
- 植原真也 (2013). 児童養護施設におけるプレイセラピーと生活援助の協働 心理臨床学研究, 30 (6), 809-820.
- 小田真二 (2012). ひきこもり青年の社会復帰を支えた CI-Th 関係と SV 関係 心理臨床学研究, 30 (5), 668-678.
- 小笠原洋 (2013). 児童養護施設において異性セラピストとしてかかわった女兒との遊戯療法 歪んだ対人イメージの変化について 心理臨床学研究, 31 (1), 49-59.
- 岡本茂樹 (2013). 無期懲役受刑者に対するロールレタリングを用いた面接過程 心理臨床学研究, 31 (1), 95-106.
- 岡村裕美子 (2012). スクールカウンセリングにおける母親への個人心理療法の有効性 心理臨床学研究, 30 (5), 621-632.
- 奥村弥生 (2014). 情緒に対して恥や罪悪感を感じる 心理臨床学研究, 32 (5), 556-566.
- 大場実保子 (2012). 重傷先天性心疾患を抱えた中学生男児が困難と向き合い適応に向かった過程 心理臨床学研究, 30 (2), 140-149.
- 小澤永治 (2014). 自閉症スペクトラム障害をもつ児童養護施設入所児童への多面的アプローチ 心理臨床学研究, 32 (5), 588-598.
- 佐伯明子 (2012). 「満ち足りた無関心」の態度が見られた転換性障害者への心理療法 心理臨床学研究, 30 (2), 129-139.
- 白澤早苗 (2013). 児童相談所に一時保護された子どものプレイセラピー 心理臨床学研究, 31 (3), 477-487.
- 首藤祐介 (2011). 強迫症状を示す児童への母親を主たる実施者とした認知行動療法アプローチ 心理臨床学研究, 28 (6), 729-739.

- 鈴木美砂子 (2013). 4歳男児と母親へのプレイを用いた家族療法 関係性の育みと子育て支援 心理臨床学研究, **30** (6), 877-887.
- 高橋佳代 (2015). 児童養護施設に長期入所する女子高生に対する動作法を用いた心理的援助 心理臨床学研究, **33** (3), 298-308.
- 竹森元彦 (2012). ADHDの小1男児と保護者と学校全体を統合的に支援したスクールカウンセリングの1事例 心理臨床学研究, **30** (1), 51-62.
- 玉井仁 (2012). 事例のなかに観察された, 衝動的葛藤の実相 心理臨床学研究, **30** (5), 656-667.
- 東畑開人 (2011). 自己愛的に考えられた「自己愛」 心理臨床学研究, **29** (3), 305-316.
- 東畑開人 (2016). 「オモテとウラ」の裏 心理臨床学研究, **33** (4), 345-356.
- 辻河昌登 (2011). 親の世話役を引き受けながら生きることをめぐって 世代間伝達事例の心理臨床 心理臨床学研究, **29** (4), 442-453.
- 辻村裕子 (2011). 重傷強迫性障害であるクライエントへの認知行動療法過程 心理臨床学研究, **29** (1), 62-72.
- 上田勝久 (2013). 心理療法空間を支えるもの可能性空間の維持と崩壊 心理臨床学研究, **31** (2), 188-198.
- 上田琢哉 (2016). 心理療法における「眺め」意識 心理臨床学研究, **34** (1), 83-94.
- 上野永子 (2010). 選択制緘黙男児に対する同一セラピストによる母子並行面接過程 DWウィニコット理論からの検討 心理臨床学研究, **28** (5), 631-642.
- 山本貢司 (2012). 非機能的なメタ認知的方略とスキーマの悪循環 認知行動的アプローチで評価的思考と認知注意症候群を扱った事例からの考察 心理臨床学研究, **30** (4), 478-489.
- 山下親子 (2011). 学生相談独自の面接構造における発達促進的なかわりの意義 境界例水準の人格構造を有した学生との5年間にわたる面接過程をもとに 心理臨床学研究, **29** (2), 165-176.
- 山内志保 (2016). 統合的心理療法におけるセラピストの現前性と自己開示に関する一考察 心理臨床学研究, **34** (1), 63-72.
- 吉沢伸一 (2012). 精神分析的な心理療法の初期プロセスで「書き言葉を持ち込むこと」その力動的な理解と取扱い 心理臨床学研究, **30** (3), 377-388.

#### その他引用文献

- 藤田博康 (2016). 親の離婚を経験した子どもたちのレジリエンス——離婚の悪影響の深刻化と回復プロセスに関する「語り」の質的研究 家族心理学研究, **30**, 1-16.
- 家庭問題情報センター (2005). 離婚した親と子どもの声を聴く——養育環境の変化と子どもの成長に関する調査研究
- 厚生労働省 (2016). 平成27年(2015)人口動態統計の年間推計 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikei15/dl/2015suikei.pdf#search=%27%E6%97%A5%E6%9C%AC+%E9%9B%A2%E5%A9%9A+%E5%8E%9A%E7%94%9F%E5%8A%B4%E5%83%8D%E7%9C%81%27>  
2017年2月13日現在
- 小田切紀子 (2004). 離婚を乗り越える——離婚家庭への支援を目指して プレーン出版
- 棚瀬一代 (2010). 離婚で壊れる子どもたち 光文社新書